

「咬合調整の少ない補綴物と噛める補綴物を目指す ～技工サイドからの考察点～」

根々まり

咬合調整の少ない補綴物を目指して日常臨床を行う中、歯科医師から「咬合の高さはちょうどよいが噛めない」と、患者の訴えのフィードバック経験がある歯科技工士は多いのではないと思われる。当院でもそのようなケースはあり、再製作をした経験がある。

昨今、様々な咬合理論の中で咬合接触点の与え方は、ほぼ近い考えに至っていると考える。しかしながら、咬合調整の少ない補綴物を目指して常に悩みを抱えながら臨床を続けている歯科技工士は未だ多く、咬合は難しいと着地点が見えないままである。その原因には、印象や模型の変形、バイトの採得方法、歯周組織や筋肉から生じる被圧変位量など様々な基本原因が取り上げられる。また、歯科技工士の技術不足も研鑽の必要がある。さらに重要なことは、個々の臨床ケースで違いはあるが、歯科技工士が得られる口腔内の情報量の少なさが、実は大きな原因ではないかと考える。

さらに今後、口腔内スキャナーの普及が大きく進むと、ますます口腔内情報は重要になる。模型レスの時代が到来すると作業模型はもちろん、対合歯・プロビジョナルレストレーション模型などの参考模型もバーチャルの世界である。バイトの問題は大きく前進するであろうが、支台歯形成・バーチャル咬合器・形態・咬合の構築・歯科技工士におけるオペレーター若年化による実模型上の経験不足など、CAD/CAM 補綴の問題が完全に解決されてない中、咬合調整の問題はさらに大きくなると想像する。

これまで以上に、歯科医師における CAD/CAM 補綴の理解とプロビジョナルレストレーションなどの口腔内の検証と考察は重要になっていくと思われる。さらに補綴物の材料の種類は様々であり、それぞれの特徴を理解しながら対処する必要がある。

今回は、治療前状態・テンポラリークラウン・プロビジョナルレストレーションのセット後の口腔内印象模型に着目する。当院では、これらの模型を参考模型と称し、歯科技工士は補綴物製作時に必須模型として預かる。参考模型からは、咬合平面・ファセットの状態・運動路の見極め、そして口腔内と模型上のバイトの差異の認識など考察できる。

この考察を基に歯科医師と歯科技工士が協議し、それぞれの情報を共有することで、目指す補綴物を製作することが可能だと考える。

ここでは、口腔内情報の重要性とその意義、咬合調整の在り方や問題点を含めた、補綴物製作時の参考模型の考察点と活用方法を紹介する。